
命（ミコト）

かよきき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
命ミコト

【コード】

N8719I

【作者名】

かよきき

【あらすじ】

ミコトという植物や獣と話すことが出来る謎の青年の旅。

彼はいったいどこに向かうのか・・・

プロローグ（前書き）

ミコトの旅。ここはどこだろう・・・

プロローグ

刀だ。

刀が一本刺さっている。地面にではない。人にだ。

よく見れば、その原っぱには沢山の死体の山だ。どうやら、ここでも戦があったらしい。

死の世界……

誰も動くものはいない。

いや？音だ……風の音ではない。草を踏む音……誰かがこの原っぱを通ろうとしている。

ぐううううう……

聞こえてきたのは足音だけではなかった。腹の虫の音だ。

「ああ……腹減ったなあ……」

その男はやかましい腹を押さえている。

歳はそう……二十を越えた辺りか……着物の隙間から包帯が見える……

怪我でもしているのだろうか……

男は倒れている死体に目をやった。

ここでいつ戦があったのだろう。死体はだいぶ崩れ、獣に食いちぎられた痕もある。

その死体の横で男はしゃがむ。

「あの・・・すみません・・・この辺りに人里はないでしょうか？」

男は死体に話しかけた。死体は当然何も答えない・・・いや待て・・・男は死体の方を向いていない・・・花だ・・・花に話しかけている・・・

死体の横には戦の雑踏にも負けず名前も無い花が元気に天に向かって咲いていた。

その花に男は話しかけているのだ。

かすかに花が揺れたような気がした。

「え？ ああ、あの山の向こうに？ ああ成る程・・・ありがとう
ございます・・・」

男は立ち上がり、太陽の光が目に入らないよう右手でさえぎり”あの山”を見た。

ふと振り返る。またさっきの花を見た。

「え？ ……ああ・・・」

男はその・・・戦で死体だらけの死の原っぱを見渡した。

「本当に・・・人間はまだまだ愚かですね・・・」

悲しそうな目をして男は、その名も無い花に軽く会釈をし山の方に歩いていった。

プロローグ（後書き）

彼はいつたどこから来てどこへ行くのか・・・
そして彼の通った後に何が起こるのか・・・

つり橋を支えていた縄が突然きれた。それを機に一気に橋がくずれ落ちる。

男はあわてて来た崖に戻った。

ガラガラガラー・・・ドボン！ ドボドボ・・・
橋とともに崩れた崖の一部が下の川に落ちていく。

男は青ざめて茫然とその様子を見ていた。

「大丈夫かー？ あっちさしばらく行くともう一つ新しい橋があっからよー」

大きな声で農夫が教えてくれた。

崩れた箸の残骸を横目に農夫の言う方向に男は向かった。
しばらく行くといかにも最近作られた縄も板も新しい立派なつり橋がかかけられていた。

橋を渡り終えるとさっきの農夫が心配そうにやってきた。

「大丈夫かいアンタ。」

「本当に・・・ありがとうございました。しかし・・・よくわかりましたね。あの橋が落ちるって・・・」

「そら、アンタ・・・オレのおかげじゃないよ・・・」

農夫は背中に背負ってる薪の束を背負いなおした。

「予言だあ」

「は？ 予言？」

「この里には未来を予言してくれる。えらい神様がいるんよ」

男は何のことかわからず、キョトンと農夫を見ていた。

ヒイラギの予言

その里は深い森と高い山、崖に囲まれていた。

きつと周囲の近い村でも、この里を知らぬのではないかと思われる。だがその里には、田畑がたくさんあり、実りも多いようだ。

里の北側に大きな木がある。葉はトゲトゲとして痛そうだ。

その奥に寺のようなこの里にしては大きな建物が建っていた。

そこに、たくさんの方が集まり拜むように、一人の娘を囲み跪ひざまむいていた。

「春に西の山で蝮の子が大量に生まれた。2、3人噛まれるかもしれない・・・それから来年は早魃かんぼつが来る。今年の内うちに食料を少しでも蓄えておきなさい」

中央の娘がそう言うと大人たちは一斉に深々と頭を下げた

「ありがとうございます。ヒイラギ様。おおせの通りに・・・」

大人の一人が代表して娘に声をかける。娘はどうやらヒイラギと言いうらしい。

すると大人たちは各々立ち上がり、建物を出ていく。

「いやあ・・・ヒイラギ様の”予言”は本当によく当たるのぉ」

「はっはっはっ ヒイラギ様あつての里じゃ」

「ヒイラギ様さえいれば、この里は安泰じゃ」

里の大人たちが笑顔で去っていく。

そんな大人たちの後姿をちらっと見てヒイラギは唇を閉め不安そう

な顔をした。

「ヒイラギ様……ヒイラギ様……」

ヒイラギがふと気づくと建物の壁の下部にある空気を入れ替えるようにある引き戸から子供達が数人顔を出していた。

「お仕事……終わった？」

一人の子供がニカツト笑いながら言った。

カーゴーマー カーゴーマー……

トゲトゲの葉を持つ大きな古木の元で子供たちとヒイラギは遊んでいた。

「後ろの正面だーあーれ！」

ヒイラギを囲んだ子供達が一斉に黙る。

「イナ」

「えー当たり前〜 ヒイラギ様 絶対当たっちゃうんだもん なんかつまんなーい」

「仕方なかるう、解るのだから」

その時だった。ヒイラギが大木に見入っている一人の男を見つけるヒイラギは男を見て驚き、子供達を自分の後ろに移動させた。

「立派な『柁』の木だなあ……樹齢400年ってどこですか……」

「男もヒイラギや子供達が自分に警戒していることに気づく。」

「あ、すみません・・・邪魔しちゃいました？　あの・・・どちらからで米を分けてもらえる民家はありませんかね」

ヒイラギは冷静に男を見つめる

「お前・・・人ではないな？　人でないものが　どうして米を食う？・・・　返答次第では森中の獣を集めるぞ」

そう言うと　ヒイラギは男を睨み付けた。

男はかすかにたじろいだ。

満天の星空の下

「そんな怖い顔しないでくださいよ」

男は腰を引かして包帯だらけの手のひらでヒイラギに悪意がないことを伝えた。

「半分は人間ですよ。 半分はあなたの”お仲間”・・・」

男はヒイラギをじっと見てから、再び大きな柎の大木を見上げた。

「あなたこの”柎”^{ひいらぎ}の精霊ですよね？ そこまでハッキリ人に見える精は珍しいです。」

ハッと気づいたようにヒイラギたちに向き直りペコリと男はお辞儀をした。

「申し遅れました・・・私、ミコトと申します。」

ヒイラギは男の名前を聞くと肩の力を抜いた。

「ミコト？ その名、聞いたことがあるぞ。 昔、うっかり毒花と融合して死ねなくなった人間がいて、この世界を徘徊していると・・・お前のことか・・・？」

「う・・・うっかりって・・・」

ミコトは恥ずかしそうに頭をかいた。

陽はどつぷりと山の向こうにつかり辺りはすっかり真つ暗だ。子供たちはもうそれぞれの家に帰り夕食にありついている時間だろう。

柵の大木の下で提灯ちていとうを灯すミコトとヒイラギの姿があった。

「ぶはー まさか酒までありつけるとは……」

ミコトはぐい飲みに、再び酒をつぐ。

あぐらの前には村のものが用意してくれた、にぎり飯が4・5個ある。

ぐいっと酒を飲むたび、チビチビとにぎり飯をかじるミコトをヒイラギは微笑して見ていた。

「お前、なぜ一所ひとところに落ち着かない。見たところ悪い者ではないようだが。」

ぐい飲みを置いて大きく両手をのばすミコトにヒイラギは呟くように聞いた。

「融合した毒花の毒が強すぎましてね……あまり長くいるとその場所に毒が染み付き、植物は枯れ果て動物は病にかかり、水は腐っていきます。しかし、三日程度なら何も害もないので問題ないんですがね……」

ヒイラギは大木に寄りかかり上を向き枝の隙間から見える夜空を見た。

「では一年中、旅をしてるのか……色々と見聞していそうだな……」

「ええ・・・まあそれなりに・・・」

ミコトが美味そうにグイッとまた酒を飲んだ。

ヒイラギはゴクリと生唾を飲み込み、ミコトの方に座り直した。

「して・・・世間はどうなっておる・・・人間の世界の方だ。」

すっかり酔っ払ってきたミコトは目が座り気味だ。

「・・・妙ですね。あなた未来が読めるって、この里で評判ですけど・・・それ位、お見通しなんじゃないですか？」

ヒイラギはミコトから目をそらし唇をかみ締めた。

ぐっと拳に力を入れたかと思うとミコトの胸倉を掴んだ。

「いいから話せ！！ 酒飲ませんぞ・・・！！」

「はあ・・・」

ミコトは胸倉を掴まれたまま大きくため息をついた。

「今はまた・・・戦乱の時代ですよ・・・国獲りだか何だか知りませんが、たかが縄張り争いなのに・・・」

ヒイラギは思わず掴んだ拳から力が抜けた。

「何万という軍勢が毎日のように一斉殺しあっています。・・・
本当に愚かですよ」

ぐったりとしな垂れるようにヒイラギは、ぺたりと座り込み、地面を見た。

ミコトは、濃い紺色の中に輝く満天の星空の下、真っ黒な山々の地平線から下の所に、遠くの家々の明かりが点々と見える風景をぼつと見た。

「ここ良い・・・子供があんなに笑っている所は久しぶりです。
・・・あなたの予言のおかげでしょう・・・」

ヒイラギはヒザの上にあつた拳をギュツと強く握った。

「それが・・・問題なのだ・・・」

ヒイラギの表情は暗く深刻だった。ミコトはまたため息をついて酒つぼ持ち、中身を確かめるように振った・・・

根

「私の言葉は予言ではなく、予想なのだ。」

ヒイラギは全身に力を込めているように硬直していた。

ミコトは残り少ない酒つぼの中身を注ぎながら無言で聞いていた。

「何百年にも渡り張り巡らした根は沢山の情報を土を通してもたらず。この里のどの地盤でどんな事が起きているか・・・私には手にとるように解る。何百年も生きている私にとって原因が発生すれば結果がいつ現れるか察することはそんなに難しいことではない。」

ヒイラギは鼻息で大きくため息をついた

「だがそれも、私の本体である、この柎ねいごの根が行き渡る土地に限られる。里の者は皆、昔から私に頼りすぎて危機管理というものが皆無だ・・・こんな小さな里だ。争いに巻き込まれたら、あっという間に全滅だ・・・」

ヒイラギはミコトの前に座りなおし、目をじっと見つめた。

「ミコトよ。お前もまた悠久の時の中で沢山の事を見聞きし知識を蓄えているのだろうか？ 教えてはくれぬか？」

柎の大木が風もないのに揺れた。

「本体の木を切る以外に精霊わたくしを消す方法を・・・」

ミコトは空になった酒つぼを地面に置きほったをかけた。

「私さえ居なくなれば 里のものは自らの力で里を守るようになるだろう。 本体である「柎」はすでにこの辺りに親密に根を張り他の生き物たちを見守る”主”のような存在になっている。

里のもののためだけに、この大木を切るわけにはいかないのだ・・・

「

ヒイラギの懇願にミコトは面倒くさそうな顔しながら、両目を力いっぱいつぶり、そして、ぐい飲みを地面に置いた。

そして片目をパチつと開いた。

「結論から言うと知りません。 精霊は本体の精神そのもの・・・本来自分で姿を現したり消したり出来るはず・・・だがそれが出来ないと言われても他の生物には手の出しようがない。」

ヒイラギは一瞬固まった・・・がすぐに下を向き提灯の明かりに目をやった。

「・・・そうか・・・」

柎の大木の前にある田畑のあたりから水溜りに蛙が飛び込んだような音が聞こえた。

「が・・・人の前から姿を消すのなら、他に方法はありません」

そこに言葉に弾かれたように ヒイラギは再びミコトを凝視した。

ため息

大きな柗の古木は、そのトゲトゲした葉をゆるい夜風になびかせていた。

その幹の元で薄暗い提灯の灯りが、ゆらゆらとほのかな視界を作っている。

「枝分け”です”」

ミコトは、少し寒いのか着物の両裾に交互にしまつように腕を組んだ。

ヒイラギはミコトの言葉に目を見開き凝視した。

「柗の意識を一本の枝に集中しその枝を切る。そして誰も知らない場所に”挿し木”すれば精だけを移動すれば精霊だけを移動できると聞きます。精霊のついた枝は生命力も強く心配せずとも必ず根がつくと言われています……でもね……」

ミコトは嫌そうに体を捻った。

「な……なんだ？」

ヒイラギはドキドキしてミコトにまた掴みかかりそうになったのを堪えた。

ミコトは捻りながらチラツとヒイラギを見た。

「あなたは人に感化され木にしてはあまりに人に近く感情があり過ぎる……誰もいないところに行けば一人ぼっちになる……」

”孤独”は寂しくてつらいですよ？「

ヒイラギの拳はまたギュツと握られた。

一瞬の沈黙が漂う・・・しかしヒイラギは迷わなかった。

「かまわない。 やってくれ」

「え?! 私が?」

「他に誰がいる!?!」

ズイッとミコトに詰め寄るヒイラギ。

そのとき、ガサツと背後の草むらで音がした。

ミコトは後ろを振り返るが暗くてよく見えない。

そんなことはお構いなしにヒイラギは地面に両手をついた。

「頼む!! 酒でも米でも私の蔵にある物は何でもやる。」

ミコトは首をガクツトうな垂れ、大きなため息をついた。

(参ったなあ・・・ただ米を分けてもらいに来ただけなのに・・・)

ミコトは頭をかいた。

一面に広がる田畑は真っ暗で見えない、満点の星空がただただ美しく・・・

旅人のミコトは旨い酒と大好きなおむすびまで馳走になったこの上、断る理由は見つからなかった。

枝分け

夜は明け朝もやで里は霞んで見ええない。
標高の高いこのあたりの霧は強い。

そんな早朝に、昨夜泊めてもらったヒイラギの祭壇からミコトは大きな枝を持ってこっそり出てくる。

さすがに、誰も里の者は見当たらない。

ミコトはその枝をかつぎながら、里の出口の方に歩き出した。

「だいぶ縮んだな・・・」

よく見るとミコトの肩の上に小さく縮んだヒイラギがちょこんと乗っている。

珍しそうにヒイラギは自分の体を吟味した。

「まあ、本体が小さくなりましたからね。　しかしヒイラギさん・・・
・ 本当に変わってますよね。　どうしてそこまで人のためにするんですか？

まあ私は”あいのこ”ですから人の世界でもいろいろあります・・・
・ あなたは木や草・・・自然の側の者でしょう？　人の集落がどうあると本当は関心など持たないはずですけど・・・」

ヒイラギはミコトの肩の上に揺られながら朝焼けで赤みがかかった空の雲を眺めた。

「人は・・・面白い。」

ミコトは大きなアクビを一つした。

「獣の癖に、草木を育て、土地を開拓し家を作り住む。私らは何十年もかけてゆつくりと根を張るといふのに、一年もしないうちにそこいらを自分の住みやすいように変えることが出来る。・・・器用だ・・・きつと遠い将来、この世界は完全に人間が制御する世の中になっていくのだろうと本当に思う。そうなれば私のように自分や一帯を守るために生まれる精霊などはもう現れる必要もなくなるだろうと思う位にな・・・」

だが・・・そんなに器用なくせに・・・”つがい”いになるのには実に不器用で好きな相手になかなか想いを告白できず無駄に時間と気持ちをやすのだ・・・

まったく・・・面白い・・・」

ヒイラギは微笑んだ。

「昨日、見たとおりあの辺りでは私は”一本柊”でな。実も付けられず仲間も作れない私にとって、人は唯一の楽しみだった・・・ただそれだけだ・・・」

そう言うとヒイラギは言葉を切った。

なんと言葉をかけてよいのかわからずミコトも黙っていた。だが、その時だった。里の出口の崖の付近の草むらから、里に人々が何人も出てくる。

ヒイラギは慌ててミコトの懐に隠れる。

「こいつだ！！ こいつがヒイラギ様を連れ去った奴だ！！ あ
の枝にヒイラギ様が付いているんだ！！ ヒイラギ様を帰せ！！」

中央の子供が憎そうにミコトを睨み付けた。

きつと昨日のミコトとヒイラギの会話を聞いていたのだ……
ミコトは後ずさりをした……村人は詰め寄ってくる……
パツと踵をかえしミコトは全速力で走った。だがすぐ後ろの来た方
向から里の人間が群がってミコトを取り囲んだ……

ミコトの額からは冷や汗がしたたり落ちる。

こうなればもうどうしようもない……

ヒザを付きその抱えた大きな枝を里の者たちの足元に置いた。

「い……命だけはお助けを……」

ミコトがそう言うと、一人の人間が怒り心頭ながらも声を低めて言
った。

「二度と我らの里に近づくな！」

ミコトは作り笑いをしてゆっくりを会釈をした、そして立ち上がる
と、崖のつり橋の方に向かって走った。

「す……すみませんでしたー」

里の者は大事そうにその枝を抱きミコトに振り向くものなど誰もい
なかった。

ミコトは一気につり橋を渡るとまだ走りながら横目でちらっと崖の
向こうの村人達を見た。

「すごい……時間も場所もぴったりだ……本当にあなたの
予言は当たりますね……」

ミコトの懐から小さくて短い枝と、ヒイラギが覗いていた。ヒイラギもまた、崖の向こうの人々を見ていた。もう誰も追ってこない。

「言っただろ・・・予言ではない。 予想だ・・・最後の予想だ・・・」

もはや里の外であり、草木がしげる獣道をミコトはこの辺りで一番高い山に向かって歩みを進めた。

人

あまり人の入らないその山は荒れ放題で登るのが大変だった。

ミコトは少しでも植物を傷つけないよう歩いた。しかしどうしても踏んでしまうような草や花にいちいち謝って進んだ。

「お前、そんな草花とまで話せるのか・・・」

感心したようにヒイラギがミコトの顔を肩から見た。

「そうか・・・木の言葉と草の言葉は違いますからね・・・ヒイラギさんには”この方”達の言葉はわからないんですね。とても彼らは強くて

いつもいろんな事を教えてもらってます。」

「こんな草にか？」

「たしかに短命に見えますよね雑草って。でも、根はしっかりと生きていてヒイラギさんよりもすぐく年上の草も結構いらっしやるんですよ。」

ここをもう少し登れば見晴らしのいい小さい丘があるらしいです。

そこに落ち着くのはどうですか？」

「・・・ああ・・・」

ミコトの言われるがまま、は返事をした。落ち着く場所など、どうでもよかった。

後ろを振り返ると里が生い茂った木の間から見えた。

ヒイラギは里に見入る。

涙がたまっていく。

(わたしの里は・・・あんなに小さかったのか・・・)

溢れて涙は頬をつたった。

ヒイラギは生まれて何百年も経っているというのに初めて泣いた。

丘にたどり着く頃にはすっかり辺りは夕焼けになっていた。

空は赤い。

「どうですか？ 土壌も悪くなさそうですし、ここから少しだけど里も見下ろせますよ」

ミコトは土を手ででこねてみると、口に入れて味を見ていった。

「うむ・・・」

持っていた小刀で土を掘り、程よい範囲を耕し根をつけやすいよう柔らかく仕上げ、懐に隠していた小さな枝を地面に挿した。倒れないよう、丁寧に添え木を作った。

「ミコト・・・」

作業の途中でヒイラギがミコトに呟いた。

ミコトがふと振り向くとヒイラギは里をぼんやりと眺めながら言った。

「ありがとう」

挿し木作業は完全に日が落ちきる前に終わった。

ミコトは疲れて地面に寝そべっていた。
ヒイラギはポツンと挿し木された小さな柎の枝の横に座り、沈みかけの太陽を見ていた。

「では・・・私は行きます。あまり一緒にいて私の毒がヒイラギさんにうつつたら大変ですから。たまには顔を出しますよ」

「ああ。」

ヒイラギは微笑んで答えた。

ミコトは荷物を風呂敷の中に詰め立ち上がった。

「そう・・・一つ聞いてもいいですか？ さつき「最後の予想」って言うてましたけど・・・もう出来ないんですか？ 予想・・・」

ミコトの質問にヒイラギは自分の本体である小枝をさすった。

「ああ。私にはもう大きく広く張った根も、経験を積んだ幹も、遠くまで見渡せる枝も無い。ただの挿し木の苗だからな。」
「・・・そうですか・・・」

ミコトはヒイラギに大きく一礼をした。

「それでは・・・行きます。また・・・」

「ああ・・・またな・・・」

ヒイラギは立ち上がりミコトを見送った。

夜はすぐに来た。

ヒイラギの新しい住処は、本当に静かな土地だった。

どこか遠くでフクロウがホーホーと鳴いている。月は出ているようだが茂る木々の影で微かな光もない。
真っ暗な山の中でヒイラギはヒザを抱き顔を腕に抱いていた。
まわりは、木が沢山あった。だが、皆、野生のものが多くあまり言葉が発するものはいなかった。

一人の夜など、何度もあった。精霊としての意識が生まれたときは、あの土地もこの山の中と変わらない荒地だった。
人間はいつのまにか現れ家族を作り、集落になり、里になり……。いつも間にか、精霊が見えるものが現れ、子供の頃から見える者は大人になっても見えるようになり
やがて誰もが自分を見えるようになっていった。
誰もが、ヒイラギが人間じゃないことぐらい知っていた。
いつの間にか自分自身が人間とそっくりの形に変わっていった。

孤独など、いずれ慣れる。

それが自分のような木の精霊にとって当たり前なのだ。

だが、胸が凍りつきそうに寒い。こんなに寂しいということがつらいとは思わなかった。

今なら、自分の力でこの小さな本体である挿し木したばかりの枝を抜ける。

そうすれば、短い時間でこの寂しさは消えるだろう……

そんな時だった。

近くでガサツと音がした。

獣の足音だろうか……

ヒイラギは顔をあげ、音の方向を見た。

そこには見慣れた子供がたいまつ松明を持って立っていた。

里のイナという少女だ……

「……………イナ……………?」

「……………いた……………」

イナは大きな声で叫んだ。

「居たぞー!!」

すると何処からともなく数人の声が集まってくる。

「居たつて?」

「ヒイラギ様が見つかった?」

そろそろと里の者たちが集まってきた。

一晩中、自分を探していたのだ。

何十人という人間がヒイラギを囲んだ。

「ど……………どうしてここが……………」

ヒイラギは驚きをかくせなかった。

「あの旅人が、こつそりヒイラギ様の蔵の中で酒とか米とか物色していたの! だからとっ捕まえて問いただしたの!」

イナは小さいヒイラギに顔を近づけてニツカリと笑った。

ヒイラギはあわせた視線をそらした。

そして、その小さい体で皆に聞こえるように言った。

「帰りなさい。」

皆に背を向けて座り込んだ。頑としてここを動かないという意志なのか体中に力が入った。

「私にはもう、お前達を守ってやれるような力は無い。予言など出来ないのだ。これからは自分達の力で里を守っていきなさい」

沈黙が山の中に漂う。たいまつが炎でパチツと弾けた。イナがゆっくりとヒイラギに更に近づいた。

「そんなの関係ない……私らヒイラギ様に会いに来たんだ……」

ヒイラギの体から力が抜ける瞳が勝手に開いた。

「爺ちゃんも婆ちゃんも母ちゃん父ちゃんも、兄ちゃんもユキもミツも私も……みんなヒイラギ様に遊んでもらって育ったんだ……」

ヒイラギ様は私らの大切な”お人”なのに……突然居なくなるなんてヒドイよ……」

イナは泣いていた。里の者もみな、しくしくと泣いていた。

「里は父ちゃんやお爺たちが責任をもって守っていくって言ってます……だから……」

イナがヒイラギを抱き寄せ抱いた。

「これからも一緒じゃなきゃ嫌です」

ヒイラギはイナの腕の中で振り返り抱き返していた。
この枝で挿し木しこの先、どれ程の時を生きられるか、ヒイラギ自身にもわからなかった。

しかし、もうヒイラギは迷わなかった。

居られるだけ、この里の者達と一緒に居よう。

大好きな人間たちと・・・

そして、いつか命が終わったとき、いずれ生まれ変わることが出来たなら・・・

一度でいい、人間になりたい・・・

そう思った。

暗く寒い山の中でいくつもの松明たいまつの灯りがうつろいでいた。

「あ
」

ミコトは来たとき通った原っぱに居た。

「墓が立ってる・・・」

誰かが戦で死んだ者達を葬り、瑣末ながらも木の枝や石で墓を作っていたのだ。

いくつもいくつも・・・

傍らかたわに咲く花にミコトは顔を向けた。

「ああ、この間はどうも・・・え？」

花はまた微かに揺れた。

「ああ……でもね……」

ミコトは晴れ渡った空に目をやった。

「人も……満更でもないですよ……」

上空の雲は早く動き、陽は生き物にあたたかな光をふりそそぐ。
緑なるものはじつと生き物を見て、生き物は今日もただただ同じ事
を繰り返す。

私たちは生きている。

人（後書き）

このお話はミコトという男の旅の物語。

ただ、生きるということとテーマに沢山のエピソードがストックしてあります。

いずれ、続編も書いて行こうと思っていますので、また読みきってくださることを

心からお待ちしております。

また、ご意見、ご感想などありましたら是非お寄せください。

次回作へのモチベーションと共に反映をさせて頂きたく思っております。

かよきき

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8719i/>

命（ミコト）

2010年10月15日22時02分発行